

## 満洲「水稻作」の嚆矢に関する一考察

——朝鮮と満洲の日本人技術者の「乾稲」認識の差異に着目して——

湯川 真樹 江

### はじめに

本稿では、朝鮮と満洲の日本人技術者の乾稲に対する認識が異なっていたことに着目し、一八七五年頃のいわゆる満洲「水稻作」の嚆矢について検討を行う。乾稲は朝鮮在来種の京租、大邱租、龍川租などの品種を指し、乾畚（トウ）用品種とも称される。乾稲は耐旱性を有していたために、乾田（乾畚）に播種し梅雨の時期に天水を待つて灌水田に移行するという特殊な栽培法が可能であった。そのため、乾稲は朝鮮北西部の日本人技術者によって水稻や陸稲とは分けて考えられていたが、管見の限り満洲では乾稲が分類されることはなく、すべて水稻として認識されていた。そうしたことから、満洲の米作史研究においても乾稲についての言及は極めて少ない。

満洲水稲作の嚆矢についてはこれまで、一九世紀後半に南満洲各地で水稲の栽培が成功し、各地で普及したとする認識が主流であった。衣保中は、朝鮮移民が満洲で行った米作の歴史は長く、彼らが満洲に渡ってきてからの時間とほぼ同じであるとした。水稲の栽培については、一八四五年に朝鮮移民が水稲耕作の跡を発見したことや、一八七五年に金姓の朝鮮移民が「現在の遼寧省桓仁県下甸子地方において水稲を播種し、成功させた」ことを指摘した<sup>(1)</sup>。また金類は、一八七五年に鴨緑江上流の通化県上甸子一带において朝鮮移民が水稲を播種し成功させたことが、以降の水田発展の契機となったと述べた<sup>(2)</sup>。そして于春英は、一八六五年に通化県上甸子や下甸子に移住した朝鮮人が水稲を栽培したと述べ、この地域一帯での水稲栽培を指摘した<sup>(3)</sup>。

朝鮮から満洲への稲作の伝播に言及した研究には、松村高夫と朴敬玉のものが挙げられる。松村は一九二〇年代後半に、朝鮮北部農民は畑作技術を媒体として満洲（北間島地方）に移住し、朝鮮南部農民は水田米作技術を媒体として満洲（西間島、中・北満洲地方）に移住したと指摘した<sup>(4)</sup>。それに対し朴は、水稲と陸稲の伝播はより複雑な過程を経て満洲に持ち込まれたと説明し、松村の「二系列の移動説」だけでは捉えることができないと主張した<sup>(5)</sup>。朴も「一八七五年には通化の下甸子でも水稲がつくられ」たと述べ<sup>(6)</sup>、満洲米作史についての代表的な研究者の多くが、一八七五年を水稲栽培の重要な一つの契機として認識していたことが確認できる。研究者がこのように分析する背景には、朝鮮北部と南満洲では畑作中心の農業が古くから営まれていたこと（面的条件）、一九世紀後半の満洲の封禁政策の形骸化や越江罪の廃止を契機として（時間的條件）、朝鮮移民が南満洲に水稲を持ち込んだということ（ヒト・モノの移動）が共通の認識としてあったためと考えられる。

それに対し筆者は、一八七五年頃に朝鮮移民による水稲の試作が「成功」したことを一つの契機として、満洲に水稲作が広がっていったとみる従来の考えとは、やや異なる見解を有している。それは満洲の米作を乾稲に言及することのないまま水稲と陸稲の二分類で理解してしまうと、その始まりについて誤った形で認識しかねないからである。乾稲を加えた水稲、陸稲の三分類は、主に朝鮮の技師武田総七郎<sup>(7)</sup>を筆頭にして、朝鮮総督府勸業模範場西鮮支場の技術者たちの中で共有された認識であった。本稿ではこの乾稲という区分を用いて分析の糸口とし、満洲「水稲作」の嚆矢について再検討を試みる。結論を先に述べると、満洲——とりわけ鴨緑江一帯——で栽培されていた朝鮮在来種の「水稲」は多くが乾稲であり、乾稲栽培の歴史を踏まえると、一八七五年以前の栽培が十分に考えられるのである。

満洲で栽培されていた朝鮮在来種の多くが乾稲であると理解することによって、筆者は金穎の説に対して新たな見解を示すことができると考える。金は「一九世紀中期に朝鮮移民が入境し水田を開発する前は、東北にはおそらく水田農業はなかった。一八七五年に通化上甸子で初めて水稲の試作が成功する前に、東北に移住してきた関内移民が広く栽培していた<sup>(8)</sup>水稲はおそらく陸稲であった」と指摘する。また金は、渤海国期の「盧城之稲」は水稲として認識されているものの、その後「何故だかわからないが、渤海国が減びてから東北地区には基本的に水稲を栽培した記録がなく、水稲の栽培は続けられなかった。これは一つの歴史の謎である」と述べている<sup>(9)</sup>。こうした金の指摘に対し、乾稲の性質を理解した上で満洲の状況を考えれば、一九世紀中期以前に乾稲が栽培されていた可能性も否定できない。

なお金は、乾稲とその主な栽培法であった乾田直播法についても言及している。「二〇世紀初乾田直播法が朝鮮平安南北地区の水稲耕作の主な方法であった。朝鮮平安南北道西部海岸の平地には乾田直播の水田総面積が五万町歩あり、一〇〇種の耐旱性乾稲品種があった。朝鮮のこの乾田直播法は近代朝鮮移民の東北への移住に伴い持ち込まれた」<sup>(10)</sup>。このように金は「乾稲品種」に言及してはいるものの、それを分類、考察してはおらず、水稲として一括に捉えており、乾田直播法という農法が満洲に伝えられたとしている。つまり金の認識によると、朝鮮移民は満洲への移住に際し、水稲を持ち込み乾田直播法などの農法によって栽培が「成功」したため、それが以後の水稲作展開の契機となったとみているのである。なお、こうした見解は、これまで他の研究者の間にも共有されてきた。それは後述するように、代表的な史料であった南満洲鉄道株式会社（以下、満鉄）関係資料そのものが乾稲を水稲とみなし、乾田直播法という農法を持ち込んだと記しているからである。さらに満鉄関係資料には満洲水稲作の嚆矢が一八七五年頃と記されており、それに倣った先行研究も多い。そのため満鉄関係資料の記述は、現代の研究者の認識に一定程度影響を与えていたことが指摘できる。

参考までに、朝鮮農業史側の研究状況を述べておきたい。朝鮮の著名な古農書である『農事直説』においては、稲は水稲のほかに陸稲を意味する旱稲（または山稲）が記載されており、管見の限り乾稲という語は確認できない<sup>(11)</sup>。また、日本人が一九〇七年に刊行した初の朝鮮全土の調査である『韓国土地農産調査報告』においても、稲は水稲と陸稲の二つに分類されている。この報告書の執筆を担当した本田幸介（勸業模範場初代場長）は、水稲の項目にて特殊な栽培法の稲を「陸稲二似」たものと記述しており、この時期の著名な日本人技術者も乾稲についての認識を

有していなかったとみられる。<sup>(12)</sup>なお、植民地期の研究については、本論文の中心部分となるため、後に詳述する。戦後においては、朝鮮の元試験場技術者らが編纂した資料『旧朝鮮における日本の農業試験研究の成果』（農林省熱帯農業研究センター、一九七六年）が挙げられる。この資料では、当時大部分の日本人技術者が朝鮮在来の農業を軽視してきたことを省みつつ、積極的に乾畚直播法と乾稲品種に言及しており、その価値を評価している。<sup>(13)</sup>それは、総論、総合考察などを担当した嵐嘉一が、西鮮支場長高橋昇の下で勤務していたことも関係がある。嵐は本書においてこれらの説明に多くの紙幅をさいっており、戦前あまり知られてこなかった乾稲が、戦後こうした資料の刊行によって知識が継承されることになったと思われる。

また朝鮮農業史研究においては、乾稲に言及されるだけでなく、在来農法的重要性も指摘されている。李朝後期の朝鮮農法を検討した宮嶋博史は、農法の発展を水田と旱田に分けて考察し、水田農法の発展方向を二つの点で確認した。<sup>(14)</sup>一つは直播法から移植法（田植法）への移行で、もう一つは乾畚法技術（稲の乾田直播法）・乾秧法技術（陸苗代法）の確立であった。宮嶋は、「第二の発展方向は、稲の播種から幼苗育成までの過程を乾田の状態で管理するきわめて特徴的な農法であり、このような水稲作への対旱農法の適用は、移秧法導入に際する危険防止策として、移秧法を普及させる要因の一つであった」と述べ、<sup>(15)</sup>乾畚直播法が乾燥地における「危険防止策」として重要であったと指摘している。しかしながら朝鮮農業史においても、乾稲は朝鮮北部の稲作を説明する際に簡潔に言及される程度であり、あくまでも水稲と陸稲の二分類で検討されるのが主流であった。

現在の韓国側の研究については、洪鐘佺の研究が挙げられる。洪は陸稲と水稲を分けて考察していないものの、

その分析手法は興味深い。洪は、もともと平安北道と咸鏡南道の農民が「稲作農業」を知っていたこと、朝鮮人が清の官吏を殺傷した「三道溝事件」の処刑者の中に平安北道の水田地帯である安州出身者がいたことを述べ、満洲水稲作の嚆矢を「通説」より一八四年早い一六八六年（三道溝事件の次の春）とした。彼は、満鉄資料である『満洲ノ水田』および『満洲の水田』にある「嚆矢」の記述について、次のように述べる。満鉄が「満洲水稲作の起源」を「一八六〇〜一八七〇、一八七五年としたのは、朝鮮で「越江罪」が廃止されたのが一八七〇年（庚辰開拓）であること、日本と通商条約を締結したのが一八七五年であること」が関係するとみられる。<sup>(16)</sup> こうした朝鮮・満洲境界史からみた洪の指摘には一定の説得力があるものの、依然として「稲作農業」を知っていたという朝鮮北部農民については、その実態が解明されていない。

以上のように満洲水稲作の嚆矢へのアプローチに際しては、これまで水稲と陸稲の二分類による栽培史や、朝鮮在来農法への考察、朝鮮・満洲境界史からの検討が有効であった。そうしたなかで、筆者が乾稲という品種群の特徴に着目する理由は、その特殊な性質が満洲水稲作の嚆矢を考える上で、ヒントを与えてくれるからである。

そのため本稿では、戦前に行われた満洲と朝鮮の稲作研究に着目し、乾稲に関する知識を紹介する（一章および二章）。次に満洲で乾稲が広く栽培されていた事実を明らかにし、満洲で乾稲が水稲として認識されてきた理由を考察する（三章）。おわりにでは、乾稲の存在をふまえた満洲「水稲作」像を提示する。筆者は、乾稲の特徴はまさに水稲日本種が移入される以前の状況を、自然の栽培環境や朝鮮人の農耕条件において「支えて」いたのであり、こうした背景があつたからこそ、当該地域における稲作が「近代的」なものへと移行する一つの結節点になったと考え

るのである。

## 一・満洲における当時の研究状況と水稲作の嚆矢に関する記述

本章では満洲における水稲試験研究の状況と、満鉄が認識していた満洲水稲作の嚆矢について確認する。満洲米作に関する先行研究では、現地檔案のほかに満鉄関係資料が多く引用されているため、それを中心に分析する。

### (一) 満洲米作研究の展開

一九世紀、清朝は「龍興之地」として満洲への移民の流入を禁じていたが、朝鮮人による人參の窃取が行われていた。一八六五年に三道溝事件が発生したことにより、朝鮮・満洲間の越境の取り締まりが厳格化した。<sup>(17)</sup>『東三省紀略』には、「率皆春夏過江。聚族開墾。收穫後裹糧南渡。仍栖旧居。」(朝鮮人が一斉に春と夏に川を渡り、一族が集まって開墾し、收穫の後に荷を携えて南に渡り、しばらく旧居に住む)と説明されており、冬季に帰郷する生活形態が朝鮮人によって営まれていたことがわかる。<sup>(18)</sup>それにより、一九世紀末には南満洲各地で朝鮮人による開田が増加した。日本人による研究は、日露戦争後の一九〇六年に関東都督府農事試験場で行われた陸稲・水稲試験が始まりで、これは日本人技術者が日本種と内地の米作に関する知識(および分類法)を持ち込んだ第一の段階であった。そして一九一二年には農商務省技師の木下彌八郎が南満洲各地で五週間の調査を行い、後に「南満洲各地ニ於ケル水田耕作状況」と題した報告書を外務省に提出した。<sup>(19)</sup>この報告書では灌溉状況や栽培面積、栽培品種(日本種、朝鮮種)、

各地域の水田状況等がつまびらかに記されており、南満洲における水田の規模を把握することに主眼が置かれている。さらに一九一四年には、南満洲の熊岳城に位置する満鉄産業試験場（一九一八年に農事試験場と改称）が陸稲と水稲の試験を開始し、その後も数々の稲作研究資料を発表した。

『南満洲米作概況』は一九一四年に大正二年版が、一九一五年に大正三年版（産業資料其二）が、一九一八年に産業資料其十が刊行された。<sup>(20)</sup> また『満洲ノ水田』は一九二二年に第一版が、一九二六年に第二版が、一九三二年に第三版が出された。<sup>(21)</sup> 一九二〇年代後半以降は『吉敦沿線水田候補地調査報告書』（一九二九年）や『中満地方ニ於ケル水田経営収支』（一九三八年）、『在満鮮農ノ移住入植過程ト水田経営形態』（一九四一年）などの調査資料も次々と刊行され、各地における米作状況や水田経営の主な担い手であった朝鮮人についての詳細が明らかにされた。<sup>(22)</sup>

## （二）水稲作の嚆矢に関する記述

『南満洲米作概況（大正二年）』には、満洲水稲作の嚆矢について記されている。そこには、「近古朝鮮人ノ点々満洲東部地方ニ移住スルニ及ヒ山間溪流ノ付近乃至ハ低湿ノ地ヲトシテ水稲耕作ヲ始メ之ヲ以テ唯一ノ生業ナトセシカ如ク、口碑伝フル所ニヨレハ通化県上甸子、下甸子附近ニハ今ヲ去ル四十年前ノ頃ヨリ既ニ朝鮮人ノ来リテ稲作ニ従事セシモノアリシト云フ（傍線：筆者、以下同）<sup>(23)</sup>」、と記されている。また、『満洲ノ水田』（第一版）では、「満洲ニ於ケル水田発達ノ沿革ニ就テハ固ヨリ記録ノ之ヲ徴スヘキモノナク又口碑伝説ノ之ヲ伝フヘキモノヲ欠如スト雖モ今ヲ遡ル大凡ソ五六十年前鴨緑江上流地方ニ移住シ来レル鮮人カ通化県上甸子地方ニ於テ水稲ヲ試作シタルヲ嚆



矢トナルカ如シ」と記されている。<sup>(24)</sup>

これらの満鉄関係資料では刊行年より四〇〜五、六〇年前の一八七〇年代頃に朝鮮人によって水稲作が行なわれたことが指摘されている。また、一九三二年刊行の『満洲の水田』（第三版）では、水稲作が始められた時期についてさらに詳しく説明されている。そこには「即ち今より約六十年前（光緒元年即ち明治八年頃）通化県上甸子、下甸子に開田せられたるを濫腸ヌマとし」とあり、開始年が一八七五年頃であったと書かれている。<sup>(25)</sup>このように満鉄関係資料には、一八七〇年代（一八七五年頃）に水稲作が始まったことが記されている。

敗戦間際に刊行された『満洲水稲作の研究』（河出書房、一九四五年）においても、米作の嚆矢について記されている。著者である横山敏男は、「満洲に於ける水田耕作は、凡そ七、八十年以前に鴨緑江上流地方に移住し来つた移住鮮人が通化県上甸子地方に於て水稲を試作せるのが其の始めであつて、其後之等移住鮮人によつて東部蒙古、海林、穆稜、吉林、額穆等の各地に發展せしめられ、更には間島を起点として現在の図佳線に沿つて全満至るところに普及發達せしめられた」と述べており、<sup>(26)</sup>満鉄地方部勸業課刊行『満洲ノ水田』（第一版）を参考にしてゐる。このように、一九四〇年代の知識人も満鉄関係資料をもとに水稲作史を記述していたことが確認できる。

### (三) 満洲における朝鮮人農業に対する認識

満鉄農事試験場では一九一四年より水稲試験研究が始められた。当初試験場の技術者は内地より日本種を持ち込み、その土地に適するか否かの試験（適否試験）を行った。その目的は朝鮮在来種ではなく、日本種を満洲で栽培す

ることにあつた。<sup>(27)</sup>

一九二一年に満鉄が刊行した『満洲ノ水田』(第一版)では、朝鮮在来の耕作法(播種)について、次のように記されている。「春期播種ニ当リ早魃ノ為メ灌漑水ニ欠乏シタル場合等ハ耕起後土塊ヲ破碎シ整地ヲ行ヒシ所ニ覆土天水ヲ俟ツ所謂乾田式ト称スル耕作法ヲ行フモノアリ。現ニ松樹東方地方及奉天西方公太堡方面ノ水田ニハ近時主トシテ此方法ニ依レリ」<sup>(28)</sup>。著者の石津半治は、朝鮮から移入された満洲の在来農法として「乾田式」なるものがあると指摘していた(一九二六年の第二版も同様)。

一九三二年に『満洲の水田』(第三版)を執筆した黒澤謙吾は、在来農法に対して朝鮮独自の漢字「畚」を取り入れて乾畚式栽培、乾畚直播という名称を用いた。黒澤は満洲各地の「水稻耕作法」は栽培品種や民族、地域ごとにそれぞれ異なると述べつつも、在来の耕作法は二つに分けられると指摘した。それは、用水の潤沢なところでは灌水式が、春期に用水が不足しがちなところでは乾畚式が行われるというものであつた。<sup>(29)</sup> 乾畚式栽培で最も特徴的である播種と灌漑水については次の説明がされている。「乾畚式に於ては、僅かに浸漬した種籾か、又は其儘のものを七、八寸乃至一尺位(或は一尺四、五寸位)の作條に播下鉄杵子にて覆土し鎮圧するか整地後の地表に撒播し鉄杵子にて掻き均らし覆土を終り鎮圧する」、また「乾畚式栽培の方法は、素より灌漑水に不足勝な箇所であるから、雨期の降水を待たなければ充分な灌漑をなし得ざるを普通とする。此式の栽培に於ても、出来れば発芽後は充分に灌水した方が好結果であるが、断続する灌漑は寧ろせざる方が良好である」<sup>(30)</sup>。満鉄では在来の耕作法について、乾田式、乾畚式栽培、乾畚直播という名称を用い、それによって水稻が栽培されたと認識されており、これを水田耕作の一

【表一】1920年頃における満洲の栽培品種

関東州	出雲早生、大邱租、龍川租、多々租、弁慶糯
安東地方	紅梗子、亀ノ尾、関山、丁租、粘租
熊岳城 松樹地方	早生大野、亀ノ尾、紅梗子、大邱租
奉天 撫順地方	京租、衣笠
公主嶺地方	麦租、大邱租、札幌赤毛
長春地方	朝鮮糯、札幌赤毛、麦租
蒙古地方	札幌赤毛、京租、大邱租
北満地方	札幌赤毛

(出典)『満洲ノ水田』1921年、43頁より作成。

形態とみていたことに特徴がある。満鉄の日本人技術者は満洲の稲作を調査した際に、水稲を乾田で行う朝鮮在来の耕作法があると理解していた。

【表一】は『満洲ノ水田』に記されている、満洲の栽培品種である。下線のは在来種を指し、それ以外のものは日本種を指している。ここから満洲の栽培品種には大きく分けて日本種と在来種があったことがわかる。日本種には日本の東北部や北海道で栽培されていた亀ノ尾や札幌赤毛などが、在来種には朝鮮在来種である京租や大邱租、麦租などがみられる。<sup>(31)</sup> 日本種は耐寒性をもつために、寒冷的な満洲各地にて栽培されていた。同書によると、在来種のうち京租、大邱租、紅梗子、麦租が「重要品種」として認識されている。<sup>(32)</sup> また上記の品種（日本種と在来種）は、『満洲ノ水田』にてすべて水稲として紹介されている。管見のかぎり、他の満鉄関係資料においても「乾稲」という用語は用いられていない。このように満洲では、水稲の在来種（主に朝鮮在来種と日本種）が各地で栽培されているという認識がもたれていたことがわかる。

## 二. 朝鮮における当時の研究状況と乾稲に関する記述

本章では朝鮮における水稲試験研究の状況と試験場の乾稲認識について確認す

る。朝鮮の米作に関する研究は、試験場と朝鮮農会の刊行資料に詳しく記載されているため、それを中心に検討する。

(一) 日本人による朝鮮米作研究の展開

朝鮮では一九〇六年に韓国統監府勸業模範場が設立され、一九〇七年に刊行した初の朝鮮全土の調査である『韓国土地農産調査報告』では、朝鮮各地の特徴や農産物の報告がなされた。

一九一〇年には朝鮮総督府勸業模範場と名称が変えられ、一九二九年には朝鮮総督府農事試験場と名称が変えられた。朝鮮総督府農事試験場本場（水原）では、日本内地の優良品種を繁殖させつつも、人工交配や純系淘汰法により、朝鮮の風土に適する品種の育成を行っていた。<sup>(33)</sup> 一九二六年には事業を拡張し、一九三〇年には南鮮支場を新設し、朝鮮南部地方に適する新品種の育成に力を入れていた。<sup>(34)</sup> 米作研究の中心は朝鮮総督府農事試験場本場および温暖な南部地方であった。

米に関する書物に関しては、朝鮮総督府勸業模範場から『朝鮮稲品種一覽』（一九一三年）、『朝鮮ニ於ケル稲ノ優良品種分布普及ノ狀況』（一九二四年）、『水稻在来耕作法ト改良耕作法トノ経済比較』（一九二八年）などが、朝鮮総督府農事試験場本場および支場から『水稻銀坊主に就て』（一九三四年）、『水稻新品種の来歴と特性に就て』（一九三六年）などが刊行された。満洲で刊行された研究書は、各地域の米作可耕地帯を調査するものや、稲作に従事した朝鮮農民の実態を明らかにするものが多いのに対し、朝鮮では朝鮮在来種の説明や在来耕作法の解説、改良耕作法

との比較研究が多いのが特徴といえる。

## (二) 朝鮮における乾稲研究の展開

朝鮮においても日本人によって各地の水田状況が調査され、内地と同様、水稻と陸稲の二分類によって研究が行われていたが、朝鮮北西部の試験場を中心に伝統農法に対する関心と乾稲についての知識の萌芽がみられた。以下、『朝鮮農会報』などの記述から乾稲や乾畝の認識についての変遷を確認する。

『朝鮮農会報』第六卷八号「平安北道の稲作法」(一九一一年)には、「直播に二法あり、一は水田法の整地をなして播種し、一は陸田法の整地をなして播種す<sup>35)</sup>」とあり、栽培法が異なる稲作法について言及されていた。また、『朝鮮農会報』第八卷一号「乾畝に就て」(一九一三年)には、「乾畝はその用水不足の為、下種当時には普通畝の如く灌水することを得ず、雨季降雨を俟ち初めて潑留灌溉を行ひ得る」と書かれており、乾畝式は播種時に灌水せず<sup>36)</sup>に、雨季の天水を待つて灌溉栽培へと移行する栽培法であると説明されていた。一九一三年には既に「乾畝」という言葉が用いられている。また、朝鮮総督府勸業模範場が執筆した『朝鮮稲品種一覽』(一九一三年)には朝鮮各地における栽培品種が記されており、代表的な乾稲品種である朝鮮在来種の大邱租や龍川租、麦租などは、水稻にも陸稲にも分類されていた<sup>37)</sup>。その理由はおそらく調査時期によって、田の状況が変化(雨季に乾田から灌水田へと移行)した為に、調査者の認識にズレが生じたものと考えられる。

また、『朝鮮農会報』第一一巻五号「学理上より見たる乾畝栽培法」(一九一六年)では勸業模範場の技術者であつ

た武田総七郎が、「大邱稻及龍川稻は乾稻中には優良なりと雖之を内地の優良なる品種に比すれば甚だ劣等なるを免れず<sup>(38)</sup>」と述べ、この頃には乾稻という名称にて特定の品種が言明されていた。武田は乾稻について、「今日乾稻と称するもの必ずしも乾畚のみに限りて栽培せらるゝものにあらずして、多くは普通畚にも栽培せられ」、「乾畚と水稲とは栽培の方法こそ異なるも両者の間に性質上特異の点あるにあらず、平安南道平安郡永柔面に於て水稲日の出、陸稻オイランを乾畚に栽培したるに其結果敢て不良ならざりしといふ」と述べ、その性質が曖昧なものであることを指摘した<sup>(39)</sup>。武田は乾稻が普通畚（すなわち灌水田）でも栽培できること、また水稲と陸稻が乾畚でも栽培できることを伝えていた。さらに、一九二四年の『朝鮮農會報』第一九卷七号には「黃海道の水田に乾稻米移植計畫<sup>(40)</sup>」が、一九二五年の『朝鮮農會報』第二〇卷六号には「黃海道<sup>(41)</sup>の乾稻奨励」（一九二五年）が掲載されるなど、この頃には黃海道で計画的に乾稻を移植、奨励する活動もみられた。

また、武田は退官後の一九二七年に『実験 稲作新説』（明文堂）を刊行している。ここでは乾稻について次の説明をしている。

朝鮮には水稲と陸稻の外に、乾稻と称せられて居る稻がある。之れも植物学的には水稲、陸稻と區別すべき何等の特徵もないけれども、特に乾燥地に於ける特殊の栽培法に適應する稻種として、実用的に區別せられて居るのである。此稻の栽培法は、特に乾稻栽培法と云はれて、平安南、北、両道の西部海岸地方の平坦部の乾畚（畚は田地の意なり）で行はれて居るので、其の要領は、種子を畑地状態の下に、畑作物と同様に下種し、雨季即ち七八両月の至るを待ち、雨水を瀦留して、田地状態とするので、即ち生活初期約二ヶ月間は、畑地生活をなし、

後期約四ヶ月間は田地生活をなすのである。而して此栽培に供する稲種を総称して乾稲と云ふのである。乾稲の品種は其の数が甚だ多くて、乾畚の総面積約五万町歩に対して、殆ど百種に及んで居る。是等は何れも耐旱性が強きものであつて、水稲から区別せられては居るけれども、矢張り田地にも栽培せられるので、多くは田地、乾畚両用の品種である。又之れを陸稲と比べて見ると、七、八月以後に於ては、彼は普段の灌水を喜ばぬけれども、之れは水稲と同様灌漑を絶へさぬを必要とするので、即ち生活の前期には陸稲に類する生活を好み、後期には水稲に類する生活を喜ぶのである。而して前期の耐旱性の強弱により、田地、乾畚兼用の品種と、純乾畚品種との区別が生ずるのである。<sup>(42)</sup>

一九二八年には朝鮮総督府勸業模範場にて『平安南道に於ける乾畚』が刊行された。そこには、「乾畚に栽培さる、品種は耐旱性耐水性共に一般に強きが如きも水稲及び陸稲に於ける品種も亦乾畚用として供用され得るものなり」<sup>(43)</sup>、而してこれが栽培法は普通の水稲及び陸稲とは全くその趣を異にし用水は概ね他より灌漑するの設備なく殆ど降雨を待ちこれを潅溜して生育せしむる特殊の稲作にして当地方の如き乾燥地帯に於ける耕作法としては合理的なる方法を講ずるものなり<sup>(44)</sup>と説明されている。このように乾稲は朝鮮の日本語雑誌において度々言及されており、乾稲に対する認識は武田個人の理解のみに留まらず、朝鮮勸業模範場の技術員や朝鮮農会にも広がっていったことがわかる。

また、一九三二年に刊行された『朝鮮総督府農事試験場成績要覧』では、「水稲、陸稲及び乾稲ノ発芽ノ差異」という項目がもうけられ、研究成果が報告されていた。京畿道水原の本場刊行資料においても、研究対象とされていた

たことが確認できる。<sup>(45)</sup> 本成果書において興味深いのは、他の試験では水稲と陸稲のみ記述しているのに対し、時折水稲・陸稲・乾稲と三分類での試験成果が記されていることである。乾稲という用語が用いられてはいるものの、それについての具体的説明はみられない。本書が植民地朝鮮での研究成果報告という性格上、内地の研究者も読者対象としていられると思われるが、詳しい説明がみられないのは乾稲の位置づけが極めて小さく、局地的なものとして認識されていたからであろう。そこから本場と朝鮮北部の支場との温度差が感じられる。

### (三) 乾稲品種の特徴

朝鮮総督府勸業模範場刊行の『平安南道に於ける乾畚』に記された一九二二年の調査では乾稲品種の数が六十余种にも達し、平安南道では数多くの乾稲品種が存在していた。<sup>(46)</sup> 本書には、満洲でみられる大邱租、龍川租、麦租、京租などの品種も記載されている。これらの品種の由来と特徴、栽培方法については、次のように説明されている【表二】。

乾稲の中には大邱租や龍川租のように数十年から百数十年の歴史を有する品種もあり、その栽培法も朝鮮農民によつて李朝後期から用いられたものであった。龍川租は「純乾畚種」として認識されたのに対し、大邱租は「普通畚 乾畚何れにも栽培するに適す」と兼用が可能な品種として認識されていた。大邱租が「水稲品種」として移入されたという経緯も興味深い。また、龍川租は耐塩性を有し、海岸地方に栽培されていた。このことは、『平安北道ニ於ケル乾畚ノ調査』の付表に示されている、朝鮮半島西側海岸地帯に乾畚が多かった点にも符合している（図



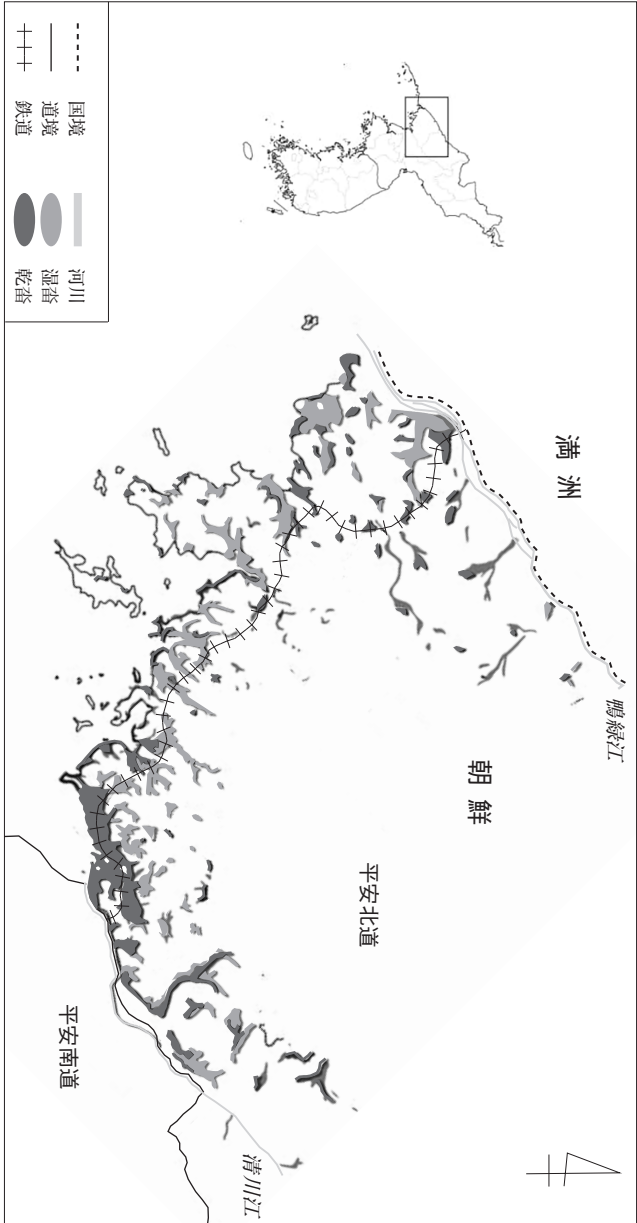
【表二】朝鮮側資料にみられる品種の由来と特徴

龍川租	由来	平安北道より約百数十年前漂流民の携へ来りたるものと云い又二百年前なりと云ふものあり
	特徴	純乾畚種にして耐旱性強く他の品種に比し比較的瘦地に好適し塩分に対する抵抗力強きがため海岸地方に多く栽培さる
大邱租	由来	水稲品種として慶尙北道大邱付近より数十年前移入したりと云ふ
	特徴	比較的肥沃なる地に適し乾畚にありては稍、水湿多き地域に栽培され収量品質共に良好なり 本種は普通畚乾畚何れにも栽培するに適す
京租	特徴	栽培面積極めて狭く中生種に属す 粳は中粒にして長き黒褐色の芒を有す 節は黒色を呈す 収量品質共に中位にあり
麦租	特徴	本道安州郡地方に於て往々龍川租と交互に輪作栽培せらる、品質劣等なる早生種なり 粳は細長にして淡黄色 芒は極めて長くして同色なり 茎葉共に淡青にして草丈大邱租に相類似するも節が黒色なる為め他の品種との識別容易なるを以て輪作栽培により他種との混淆防止をなす目的のために貴重せらる 性強健ならざるも分蘖可良なる点に於て他種に優れり
粘租	特徴	茎葉共に淡青色 粳は黒味ある赤褐色

(出典)『平安南道に於ける乾畚』4-5、28-29、33-34頁をもとに作成。本道とは平安南道を指す。京租、麦租、粘租について由来の記述はない。満洲でも栽培されている品種に絞って作成した。

二。朝鮮総督府勸業模範場は一九二八年に灌漑畚に適する品種が牟租、灌漑畚と乾畚のいずれにも適する品種が大邱租、乾畚に適する品種が龍川租と芮租であると、これらを奨励品種に指定していた。<sup>(47)</sup>

一九二九年、朝鮮総督府勸業模範場は各道にて農事試験場を設立した。どの品種を乾稲とするかは時期ごとに違いがみられるが、<sup>(48)</sup>乾稲に関する研究は主に平安南道農事試験場で行なわれていた。一九三六年および一九三八年の平安南道農事試験場の事業報告書を見ると、試験成績が一・水稲、二・乾稲、三・陸稲、と三つに分類され、<sup>(49)</sup>各種ごとに試験が行なわれていたことが確認できる。また、西鮮支場長であった高橋昇も現地の農法を重視し、乾稲についての研究を行っていた。高橋昇に



【図一】朝鮮平安北道における乾畝の分布

(出典) 平安北道種畑場「平安北道ニ於ケル乾畝ノ調査」1923年、付図「平北の乾畝地分布状況図」より作成。通化県上甸子は鴨綠江上流域北側に位置する。

【表三】 1920年頃における満洲の乾稲品種

	栽培地域	日本種	在来種		
			乾稲	水稲	
南満洲	関東州	出雲早生 弁慶糯	大邱租 龍川租	多々租	
	安東地方	亀ノ尾 関山	丁租 粘租	紅梗子	
	熊岳城 松樹地方	早生大野 亀ノ尾	大邱租	紅梗子	
	奉天 撫順地方	衣笠	京租	—	
中満洲	公主嶺地方	札幌赤毛	麦租 大邱租	—	
	長春地方	札幌赤毛	麦租 朝鮮糯	—	
北満洲	蒙古地方	札幌赤毛	京租 大邱租	—	
	北満地方	札幌赤毛	—	—	

(出典)『満洲ノ水田』1921年、43頁および『平安南道に於ける乾番』28-29頁より作成。日本種はすべて水稲である。どの品種を乾稲と呼ぶかは時期等によって多少の違いがあるが、筆者は最も乾稲の説明が詳しい『平安南道に於ける乾番』を参考にして分類した。なお、南満洲鉄道地方部農務課『農事試験場報告 第32号 満洲に於ける水稲栽培』1931年、82頁、および『朝鮮稲品種一覧』付録によると、朝鮮糯の別名は粘租、京租の別名は丁稲であるため、乾稲に分類した。『朝鮮稲品種一覧』を分析する研究者によると、多々租は朝鮮にて「言わば、この時代の数少ない“普及品種”であった」という(穂本洋哉『日本農業近代化の研究——近代稲作農業の発展論理——』藤原書店、2015年、220頁)。紅梗子(別名は光頭児)は不明な点が多いため、便宜上水稲に分類した。

よる調査(昭和一五年)によると、平安北道龍川郡の乾番は主に山岳地帯の水利が不便であった場所にあったとの記述がある。<sup>(50)</sup>このように、朝鮮では乾稲についての研究が進んでいたことがわかる。

### 三、南満洲の米作状況

#### (一) 乾稲栽培の連続性

次に、満洲での栽培実態を検討する。【表三】は筆者が【表一】をもとにして在来種をさらに乾稲と水稲とに分類したものである。ここから満洲で栽培されていた朝鮮在来種には乾稲品種が多かったことが確認できる。当時満洲で栽培されていた在来種九種のうち、五種が『平安南道に於ける乾番』で紹介されていた乾稲品種(別名も含めると七種)であつ

【表四】 満洲側の資料にみられる品種（乾稻）の特徴

品種名*	主な特徴及び栽培状況
龍川租	「品質稍可ナリ」（註1）
大邱租 〔赤大邱租〕	「米質佳良なり在来種中の優良品種として推奨するに足る主なる栽培地方関東州熊岳城盤山地方」（註2）であり、安東米、松樹米としても流通していた。松樹米は関東州産の代表的銘柄であった（註3）。
京租	奉天では奉天米（とくに早生京租を指す）、撫順では撫順米、興京では興京米として市場に出回っていた。とりわけ奉天米の中の北陵産は満洲取引所で標準米に指定されていた。（註3） 「特に京租が最広く栽培せられ本地方に於ける栽培面積の殆ど九割九分を占めてゐる状態である。是れ即ち地理的に観るときは中部地方と云ひ栽培品種より見るときは之れを京租地帯と称へ得る所以である。」（註4）
朝鮮糯 〔粘租〕	「収量品質稍良好」「長春、吉林地方に稀に栽培さるゝを見る。」（註5）

\*〔 〕内は別名を表す。

（註1）南満洲鉄道株式会社農事試験場『農事試験場彙報 第12号 満洲ニ於ケル水稻栽培ノ研究』大正11年序、16頁、同書には麦租についての言及があるものの、紅光頭に酷似しているため調査中とある（17頁）。

（註2）『満洲ノ水田』1921年、43-44頁。

（註3）「満洲米作と品種 総収穫予想高は百九十五万六千余石」『中外商業新報』1926年3月8日。

（註4）『満洲に於ける水稻栽培』63頁。

（註5）『満洲に於ける水稻栽培』82、85頁。

た。

【表四】では、満洲側の資料にて乾稲品種がどの程度栽培、評価されていたのかを確認する。このように満洲においては、京租と大邱租が重要な品種であり、京租に至っては一九三〇年代初頭において満洲中部地方の栽培面積の九割九分を占めるほどであった。資料では満洲中部地方一帯が「京租地帯」とであると記載されている<sup>(5)</sup>。しかしながら、寒冷な満洲にて栽培される乾稲品種の数は、朝鮮に比べかなり少なくなっていたことが確認できる。これらの栽培地は満洲南部と中部であった。

興味深いことに、龍川租、大邱租、

京租などは一九一〇年代にすでに、朝鮮の平安南北道にて栽培されていた。<sup>(52)</sup> 当時これらの品種が南満洲で栽培されていたことや、龍川租の百数十年という歴史を踏まえると、一九世紀にはすでに鴨綠江一帯に分布していたものと考えられる。

(二) 満洲で「水稻」研究が進められた理由

このように乾稲が長らく満洲で栽培され、一九三〇年代初頭にはその面積も広大であったにもかかわらず、技術者はなぜ京租などを水稻として理解したのか。果たして彼らは乾稲という用語に触れたことがなかったのか、それとも認識したうえで水稻としてみなしていたのか、その詳細を知ることが困難である。しかしながら、彼らが在来の品種を水稻として理解するに十分な理由が、満洲独自の自然環境と灌漑設備の需要にあったことがわかる。当時の特徴を把握していこう。

朝鮮人は満洲への移住後、荒地や窪地などの低湿地にて稲作を行っていた。<sup>(53)</sup> 満洲各地方においては河川の水が灌漑に利用されていたが、それは「用水力自然ニ満ツル様河水ト耕地トノ高低ヲ考慮シ河中一定ノ場所ニ石堰ヲ作り水ノ流入ニ便ナラシム而シテ若シ一朝洪水アル時ハ石垣ヲ破壊シ水害ヲ免ルルノ装置ヲ為シ居レト甚タ不完全ナリ」というものであった。<sup>(54)</sup> そのため、朝鮮人は移住後に田の近隣に住み、天気の変化に対応しながら日常的に稲作管理をしていた。<sup>(55)</sup>

一九一二年には、農商務省技師木下彌八郎による満洲の実地調査が行われ、米作可耕地が五八万町歩と報告され

た。その規模は、南満洲土地総面積一八六万二〇〇〇町歩に対し、約一三%にあたるとみられたほどであった。とりわけ鴨緑江や遼河、松花江などの河川流域が開田可耕地として期待されており、広大な土地と豊富な水源が「水稻」栽培を支えるとみられていた。<sup>(56)</sup>

一九一八年に刊行された『南満洲米作概況』では、「南満米作ノ一大欠陥ト称スヘキハ降水量ノ不足」であるけれども、「人工ニヨリ天然ヲ利用シテ灌溉ノ方法ヲ講スル時ハ南満ノ地如何ニ乾燥甚タシト雖モ稔々タル美田ヲ見ルコト必スシモ困難事ニアラサルナリ」として、灌溉設備の重要性が強調されていた。<sup>(57)</sup> 試験場ではこの地の乾燥気候（ならびに満洲に広がる塩性、アルカリ土壌）を如何に「克服」し、水稻を栽培するかが開発研究の焦点であったために、積極的に農場にて掘削式の灌溉設備を用いた。灌溉設備によって土壌を十分に潤し、塩分を洗い流すことが求められていたからである。そのため、満洲の開田可耕地を開発するための総工費は一億五三万四一五〇〇円を必要とし、平均一反歩収量を一石八斗とした場合、毎年一〇五六万三二一〇石の玄米を収穫することが可能とみられていた。<sup>(58)</sup>

とりわけ間島は満洲の他の乾燥地帯と異なり、河川が多く灌溉が比較的容易であった。<sup>(59)</sup> 一九一〇年頃、朝鮮人は間島地域で殆ど水稻の栽培をしていなかったが、この地は「平地ニアリテハ灌溉水ノ便ヲ得ザルノ地殆ド之ナシ」というほど灌溉設備の設置が容易で、「頗ル良好」と評価されるほどであった。<sup>(61)</sup> 間島の環境は、東洋殖産株式会社の調査関係者にとっても魅力的に映っており、水稻耕作の発展が大いに期待されていたのである。

さらに満洲奉天以南の「温暖にして生育期間長く挿秧及灌水田直播、乾畚直播何れにも能く適する地方にありて

は、之れ等栽培法を適宜併せ行ふことが最も有利」であつたために、朝鮮人は移住先の土地状況に応じて、栽培法を選んでゐた。

この時期、水稲日本種も各地で輸入されていた。満洲では日本の東北地方などから小田代、亀ノ尾や早生大野、札幌赤毛などの耐寒性をもつ品種が多く持ち込まれていた<sup>(63)</sup>。これらの品種は水田にて多収の好成績を示し、満洲南部のみならず中部や北部での栽培も可能であつた。朝鮮人は、従来の京租や大邱租などの乾稲品種を乾畚や水田で栽培する一方で、水稲日本種も積極的に取り入れていたのである。

このような米作への期待と灌漑設備を支える技術的・環境的な背景は、水田の拡大をもたらし、技術者らにとつて、京租などの品種を乾稲と水稲に分ける必要性が低下した<sup>(64)</sup>。また満洲中部や北部の寒冷地帯においては、灌水田の保温機能が極めて重要であつた。広大な未開拓地が控えるなかで、満洲の技術者は灌漑設備の充実や、耐寒性・多収性を高める新品種の開発と普及が、朝鮮在来種の研究よりも重要と考えており、その後の稲作研究は主に水稲日本種を対象に進められるようになったのである<sup>(65)</sup>。それは、満洲の乾稲作が水稲作と見做される一つの重要な契機となつたといえよう。

## おわりに

本稿では、満洲と朝鮮——とくに朝鮮総督府勸業模範場西鮮支場および平安南道農事試験場——では品種に対する認識が異なつてゐたことを明らかにした。満洲では朝鮮在来種の龍川租や大邱租、京租などを水稲とみなしてい

たのに対し、朝鮮北西部の試験場ではこれらを乾稲（史料によっては乾番用品種などと表記）とし、適応する田も分類していた。さらには乾稲品種の歴史（大邱租は数十年、龍川租に至っては百数十年）をも把握していた。その一方で、満洲の技術者たちは乾稲についての認識が殆ど深まることなかったことを指摘した。

日本人が満洲に渡った当初、彼らは日本に親しみのある分類法（水稻と陸稲）を用いて現地農業を観察し、その嚆矢について記録した。日本人技術者は現地に近代農業試験研究の手法を導入し、慣れ親しんだ水稻品種を日本から取り寄せ、その開発に力を注いだ。開発は保水・保温の効果をもつ灌漑設備を整えることを緊要の課題とし、企業規模の大規模な工事と連動していた。一方で、京租などの乾稲品種は朝鮮人によって持ち込まれ、その栽培率は満洲中部において九割九分を占めるほどであったが、満洲の試験場において乾稲に関する認識は殆ど深まることなかった。<sup>(66)</sup>

朝鮮においても当初は、同様の展開がみられていた。宮嶋博史は「二十世紀初頭以降の朝鮮農業を指導した主体は言うまでもなく日本人であったが、彼らは朝鮮に独特な様々の慣行技術の意味を、十分に認識することができなかった。つまり、湿润地に属する日本での農業体験しか持っていなかった彼らは、セミドライな自然条件への対応を主眼とした朝鮮農法の特徴を把握することができなかったのである。そのために、植民地期の日本による農業技術指導は、おのずと日本農法の朝鮮への移植に主眼が置かれるようになったのである」と指摘している。<sup>(67)</sup> 宮嶋が言うように、朝鮮における大部分の日本人技術者は、在来の稲作法を追求するという方向には進んでいかなかったのである。



しかしながら、朝鮮には珍しく現地の農法に着目する武田総七郎や高橋昇のような「異色」の技師がおり、彼等は徐々に現地の稲の特徴を把握していった。<sup>(68)</sup>ただし、その成果は刊行資料を通して朝鮮や内地に紹介される程度で、帝国内で広く共有されることはなかった。戦前において、乾稲と乾畚栽培法は朝鮮北西部における実用的な用法として共有されるにとどまっていたのである。

このような乾稲認識の差異について、満洲の技術者と、朝鮮北西部の技術者との間に数十年の研究蓄積を経て差が生じていたことは興味深い。満洲と朝鮮は鴨緑江や図們江を挟んで隣接していたにもかかわらず、相互の研究交流は殆どみられなかったのである。<sup>(69)</sup>

こうした研究者間の事情とは関係のないところで、乾稲は朝鮮北部と南満洲——特に鴨緑江一帯——にて長らく存在していた。乾稲の特徴はまさに乾燥した土地での栽培や、大規模な灌漑の設置が困難であった朝鮮人の農耕条件において適していたのであり、それは後に水稲日本種などが多く移入される「土台」<sup>(70)</sup>になっていた。このような乾稲の特徴および歴史を踏まえると、満鉄記載資料（一八七五年頃）にみられるような満洲「水稲作」の嚆矢の状況は、封禁政策の形骸化や越江罪の廃止等によって朝鮮人が「定住」——冬期は朝鮮に帰郷する生活形態であった——したことにより、日常的に稲作管理ができるようになったことが大きな要因としてみられ、その背景に南満洲での水源（河川敷や低湿地など）利用と、耐旱性や耐塩性を有する乾稲品種の存在があったことが指摘できる。そのため、一八七五年頃という記録は水稲作が「成功」した画期的な年としてみるのではなく、封禁政策の形骸化等という契機を経て、長らく朝鮮と満洲で栽培されていた乾稲などが日常的に管理・栽培されるようになった年代とみる方が

自然である。ただ、その栽培についての記述は、一九一〇年代に至るまで殆どみられなかったために、「水稻作」の嚆矢についての史料は乏しく、「満洲ニ於ケル水田發達ノ沿革ニ就テハ固ヨリ記録ノ之ヲ徴スヘキモノナク又口傳伝説ノ之ヲ伝フヘキモノヲ欠如ス」といった状況であったのである。<sup>(71)</sup>

このように満洲「水稻作」の嚆矢については、その「曖昧」な特徴をもつ乾稲を十分に理解し、朝鮮側の資料と朝鮮北部および南満洲の環境的側面から踏まえていかなければならない。<sup>(72)</sup> 筆者は乾稲そのもの特徴と朝鮮の在来農業技術は、乾燥した満洲にて掘削式灌漑を設置し、水稻日本種が輸入され普及していくという「近代的」な展開がなされる時期において、結節点という重要な役割を有していたと考えるのである。

註

- (1) 衣保中『朝鮮移民与東北地区水田開發』長春、長春出版社、一九九九年、一八頁。
- (2) 金穎『近代東北地区水田農業發展史研究』北京、中国社会科学出版社、二〇〇七年、二二頁。
- (3) 于春英『偽滿時期水稻發展研究』『社会科学輯刊』二〇〇九年三期、一四七頁。
- (4) 松村高夫「日本帝國主義下における「満洲」への朝鮮人移動について」『三田学会雑誌』六三卷六号、一九七〇年、六七—六八頁。
- (5) 朴敬玉「朝鮮人移民の中国東北地域への定住と水田耕作の展開——一九一〇—二〇年代を中心に——」『現代中国』八二号、二〇〇八年、七七頁。
- (6) 同右、七八頁。注での記述。朴は『朝鮮族簡史』（延辺人民出版社、一九八六年）を参考としている。
- (7) 武田総七郎は一九九二年七月に東京帝国大学農学科を卒業後、一九九九年に愛知県農事試験場技師から場長へ昇進し、一九〇二年九月に農事試験場山陰支場長、一九〇五年に農事試験場畿内支場に在勤として任命された。一九一四年には朝鮮総督府勸業模範場本場の技師として勤務、一

九二〇年に朝鮮総督府勸業模範場西鮮支場の場長に就任し、一九二四年に退官した。

(8) 『近代東北地区水田農業発展史研究』一八頁。

(9) 同右、一頁。

(10) 同右、一二七―一二八頁。

(11) 鄭招『農事直説』(等受命編)、享和年間。

(12) 農商務省農務局編『韓国土地農産調査報告 平安道』一九〇七年、一八四頁。執筆は、本田幸介(執筆当時、東京帝国大学農科大学教授兼農商務技師農學博士)と原熙(東京帝国大学農科大学助教授)が農業部分を担当した。水稻の項目のなかに特殊の栽培法の説明があり、「苗立陸稻ニ似テ稈粗剛、収米質脆弱色澤不良ナリ」「此ニ栽培スル品種ハ一般水田ニ栽培スルモノニ異ナラサルナリ」と書かれてい

る。その特徴は当初から着目されていたことがわかる。

(13) 農林省熱帯農業研究センター『旧朝鮮における日本の農業試験研究の成果』農林統計協会、一九七六年。

(14) 宮嶋博史「李朝後期における朝鮮農法の発展」『朝鮮史研究会論文集』第一八集、一九八一年。

(15) 宮嶋博史「李朝後期の農業水利——提堰(溜池)灌漑を中心に——」『東洋史研究』第四一卷第四号、一九八三年、二頁。

(16) 洪鐘侶「満洲 朝鮮人 移民水田 開拓小考——一九二〇年代 満洲 朝鮮人 移民史」이해를 위하여『明知史論』第三卷一号、一九九三年、七五―七六頁。

(17) 山本進「清代鴨綠江流域の開墾と国境管理」九州大学東洋史論集』三九号、二〇一一年。

(18) 徐曦『東三省紀略』上海、商務印書館、一九一五年、卷七、「邊塞紀略下」『鴨綠江上游右岸』「墾務」、三四五頁。

(19) 一九一三年三月七日、在奉天総領事落合謙太郎↓外務大臣男爵牧野伸顕「南満洲ニ於ケル水田経営ニ関スル調査一件第一卷 分割一」JACAR (アジア歴史資料センター) Ref:BA0401166700、三八画像目。

(20) 南満洲鉄道株式会社地方部課「南満洲米作概況(大正二年)」一九一四年、南満洲鉄道株式会社地方部課『産業資料其一』南満洲米作概況(大正三年)一九一五年、南満洲鉄道株式会社地方部課『産業資料其十』南満洲米作概況』一九一八年。

(21) 南満洲鉄道株式会社地方部勸業課「産業資料其十四」満洲ノ水田』一九二一年、南満洲鉄道興業部農務課『産業資料其十四』満洲の水田』一九二六年、南満洲鉄道株式会社地方部農務課『満洲の水田』南満洲鉄道株式会社地方部農務課、一九三二年。第二版から書名の「ノ」がひらがな

表記となった。

- (22) 南滿洲鉄道株式会社臨時經濟調査委員会『吉敦沿線水田候補地調査報告書』一九二九年、南滿洲鉄道株式会社北滿經濟調査所『中滿地方ニ於ケル水田經營収支』一九三八年、南滿洲鉄道株式会社調査部『在滿鮮農ノ移住入植過程ト水田經營形態』一九四一年。
- (23) 『南滿洲米作概況(大正二年)』一頁。
- (24) 『滿洲ノ水田』一九二一年、一頁。第一版と第二版は石津半治が執筆し、第三版は黒澤謙吾が執筆した。
- (25) 『滿洲の水田』一九三二年、一頁。
- (26) 横山敏男『滿洲水稲作の研究』河出書房、一九四五年、四頁。
- (27) 湯川真樹江「滿洲における米作の展開一九一三—一九四五——滿鉄農事試験場の業務とその変遷——」『史学』第八〇巻第四号、三田史学会、二〇一一年。
- (28) 『滿洲ノ水田』一九二二年、五八頁。
- (29) 『滿洲の水田』一九三二年、七〇頁。
- (30) 同右、七一頁。
- (31) 『滿洲の水田』一九二六年、五五頁。
- (32) 『滿洲ノ水田』一九二二年、四五頁。
- (33) 純系淘汰法(別名:純系分離法)とは、「主として在来種で、ある形質について分離がみられるとき、あるいは優良な特性をもつものが混じっているとき、いくつかの純系に分離して選抜する方法」である(農業事典編纂委員会編著『最新農業小事典』農業図書株式会社、一九八六年、一三—二頁)。
- (34) 朝鮮總督府農事試験場『朝鮮總督府農事試験場成績要覽』一九三二年、一一頁。
- (35) 成瀬利貞『平安北道の稲作法』『朝鮮農會報』第六卷八号、一九一一年、三五頁。
- (36) 八尋生男「乾畚に就て」『朝鮮農會報』第八卷一号、一九一三年、一九頁。
- (37) 朝鮮總督府勸業模範場『朝鮮稻品種一覽』一九一三年、二七九、二八三—二八四、二八七—二八八、二八九—二九二、二九五、二九七—二九八、三〇八—三一〇頁。原本には麦稻と記載されている。
- (38) 武田総七郎「学理上より見たる乾畚栽培法」『朝鮮農會報』第一卷五号、一九一六年、四九頁。
- (39) 同右、四九頁。
- (40) 武田総七郎「黄海道の水田に乾稻米移植計画」『朝鮮農會報』第一卷七号、一九二四年、五九頁。
- (41) 武田総七郎「黄海道の乾稻奨励」『朝鮮農會報』第二〇

巻六号、一九二五年、八一頁。

- (42) 武田総七郎『実験 稲作新説』明文堂、一九二七年、一六一—一六二頁。武田は水稲と陸稲について次のように述べる。「水稲と陸稲とは、植物学上からは、区別すべき何等の特徴なく、只其の栽培地及び栽培法を異にするだけのもので、畢竟実用的に区別したものに外ならぬのである。即ち田地の栽培に適するものを水稲と云ひ、畑地の栽培に適するものを陸稲と云ふのである。但し此区別は、左程厳密なるものではなく、陸稲も之れを田地に栽培することが出来るのみならず、時としては畑地に於けるよりも、却つて収量が多かつたり、又水稲も之れを畑地に栽培することが出来て、陸稲よりも収量が多いと云ふ様なこともあるのである。要するに此両者の区別は、其の早魃に耐ゆるの強弱に基づいたものに過ぎぬので、其の栽培地に関しても、氣候が大いに之れに関与して居るのである」(一六〇頁)。
- (43) 朝鮮総督府勸業模範場『平安南道に於ける乾菴』一九二八年、二六頁。
- (44) 同右、一頁。
- (45) 朝鮮総督府農事試験場『朝鮮総督府農事試験場成績要覽』一九三二年、一三頁。
- (46) 『平安南道に於ける乾菴』二八一—三〇頁。当資料では大

満洲「水稲作」の嚆矢に関する一考察

湯川

三三三

邱租を大邱稲、龍川租を龍川稲、麦租を麦稲と記載されているが、同じ品種を指すと考えられる。また、乾稲を指す言葉も統一されておらず、他に「乾菴に栽培さる、品種」「乾菴栽培品種」「乾菴用種子」「乾菴品種」「乾菴種」という表現もある。品種の記載について、例えば京租についてみると、前掲『朝鮮稲品種一覽』(一九一三年)、三〇四頁(平安北道定州郡)には京稲と書かれているのに対し、前掲『平安北道ニ於ケル乾菴ノ調査』(一九二三年)、一〇頁(平安北道定州郡)には京租と書かれている。この一〇年間という同一地域での名称変更から、調査者による理解の深化が確認できる。

- (47) 『平安南道に於ける乾菴』三四頁。
- (48) 一九二三年には大邱租、龍川租、黒大邱、芮租が乾稲として試験に用いられているが、一九三六年では龍川租と芮租が乾稲として記されている(平安南道種苗場『大正十一年度事業報告』一九二三年、七六一—七頁および朝鮮総督府農事試験場西鮮支場『朝鮮主要作物奨励品種特性表』一九三六年、一三頁)。
- (49) 平安南道農事試験場『昭和拾年度 事業報告』一九三六年、および平安南道農事試験場『昭和十二年度 平安南道農事試験場事業報告書』一九三八年。

- (50) 高橋昇著、飯沼二郎、高橋甲四郎、宮嶋博史編『朝鮮半島の農法と農民』未來社、一九九八年、一一四—一頁。平安北道龍川郡は鴨綠江の南側に位置し、対岸は満洲、安東（現在は丹東）市である。
- (51) 『満洲に於ける水稻栽培』六二—一六三頁。
- (52) 『朝鮮稲品種一覽』一九一三年、二九一、三〇〇—一三〇一頁。
- (53) 『満洲ノ水田』一九二二年、一頁。
- (54) 南満洲鉄道株式会社総務部調査課編『調査資料第二輯 問島ニ於ケル水稻』南満洲鉄道株式会社総務部調査課、一九一八年、六頁。ここでは「甚タ不完全ナリ」と評しているが、一方で同書前編にある資料には「山間ノ傾斜地ヲ開拓スルニハ鮮人独特ノ能力ニ依ラサルヘカラス彼等ハ甚シキハ三十度以上四十度ノ傾斜地ト雖クク牛ヲ使役シテ之ヲ開墾シ頗ル巧妙ヲ極ムルモノアリ」と、その技術を評価していた（南満洲鉄道株式会社総務部調査課編『調査資料第二輯 問島事情』南満洲鉄道株式会社総務部調査課、一九一八年、五頁）。
- (55) 一九〇九年の「満洲及び問島に関する日清協約」（問島協約）以後は、「永住」の考えを有する朝鮮人もいたと記されている（同右『調査資料第二輯 問島事情』六頁）。
- (56) 『満洲ノ水田』一九二二年、八五、八七頁。
- (57) 『産業資料其十』南満洲米作概況、四三頁。
- (58) 『満洲ノ水田』一九二二年、八七頁。
- (59) 白田拓郎『東部満洲地域における農業振興と米作』『東洋大学人間科学総合研究所紀要』一六号、二〇一四年。白田は一九一〇—二〇年代における問島とその北部地域に水田事業が普及した要因として、①簡易な灌漑施設の建設、②優良品種の配布、③水稻栽培技術を持つ朝鮮人の広範な移住、④朝鮮人小作人に対する地主の優遇を指摘している。
- (60) 統監府問島臨時派出所によると、一九一〇年頃の問島地域では大豆や麦、高粱などが栽培の中心であり、水稻の栽培は依然として九八町歩と極めて小規模であった（統監府臨時問島派出所残務整理所『問嶋産業調査書』一九一〇年、一九〇頁）。また、『問島ニ於ケル水稻』一頁によると、元來朝鮮北部より問島に移住した農民の多数は稲作の経験が無く、畑作を行っていたという。そこには、「偶々」朝鮮南部地方並びに咸鏡南道定平郡方面より移住してきた農民が低湿地を耕し水田となしたとあり、朝鮮からの移住民が稲の品種を持ち込んだことが記されている。こうしたことから筆者は、二〇世紀初頭の問島地域では朝鮮の各地から移住民が渡って来たために、水稻の品種が増えていったと

考えている。それに対し本稿では、歴史的に栽培されてきた鴨緑江流域の乾稲と、朝鮮人の稲作技術を利用した二〇世紀初頭の日本の開発を念頭に置いている。

(61) 東洋拓殖株式会社京城支店編「間島事情」東洋拓殖株式会社京城支店、一九一八年、三八六―三八七頁。

(62) 『満洲に於ける水稻栽培』一三四頁。

(63) 「満洲における米作の展開一九一三―一九四五―満鉄農事試験場の業務とその変遷―」。

(64) 満洲に多くの日本人が移住してきたことにより、米(水稻日本種)の需要が高まったことも要因として挙げられる。

(65) 「満洲における米作の展開一九一三―一九四五―満鉄農事試験場の業務とその変遷―」。

(66) 言うなれば京租は、陸田でも水田でも栽培が可能で、一定程度の耐旱性、耐寒性を有するために、農民にとつて汎用性が高い品種であった。

(67) 「李朝後期における朝鮮農法の発展」九一頁。

(68) 河田宏は高橋昇が朝鮮の在米農法を重視し、先見性を有していたことを示している(河田宏「朝鮮全土を歩いた日本人―農学者・高橋昇の生涯―」日本評論社、二〇〇七年)。

(69) 朝鮮と満洲での試験場勤務を経験した人物として泉有

平が挙げられるが、その経験をうかがわせる記述は見当たらない。

(70) 飯沼二郎は朝鮮の老農技術について次のように解説する。老農技術は「いわゆる『篤農技術』として、長く農村に存続した。そして、その後、急速に整備された学理農法(試験場技術)から、その『精密技術』に対する『粗雑技術』として蔑視されながらも、村における『受け皿』として、試験場の部分的な技術を総合し実用化する役割を果たしつつげた」。この点は満洲においても、「土台」と言い換えることで適用できよう(飯沼二郎「朝鮮総督府の米穀検査制度」未來社、一九九三年、四〇―四一頁)。

(71) 『満洲ノ水田』一九二二年、一頁。つまり、水稻作の嚆矢の記録が欠如していたということは、その背景に乾稲がもととあつたということを示唆している。

(72) 本稿は、湯川真樹江「満洲米作再考―朝鮮人農民が持ち込んだ品種は水稻か―」(第二八回東北アジア文化学会・東アジア日本学会春季連合国際学術大会、西南学院大学、二〇一四年五月)等の学会報告をもとに作成している。

(東京女子大学女性学研究所・客員研究員)

# TOYO GAKUHO

THE JOURNAL OF THE RESEARCH DEPARTMENT OF  
TOYO BUNKO

Vol. 105, No. 4

March 2024

A Study on the Origins of Manchurian “Paddy Rice Cultivation”:  
Focusing on How Japanese Engineers in Korea and Manchuria Perceive  
“Dry Rice” Differently

YUKAWA Makie

In this study, the author focuses on the difference in Japanese engineers’ perspectives on dry rice in Korea and Manchuria and reevaluates the theory in regards to the beginning of rice cultivation in Manchuria in 1875. Dry rice (*kantō/geondo* 乾稻) is one of the varieties of various species, such as the native species of rice found in Korea, including Yongcheon-se 龍川租, Daegu-se 大邱租, and Gyeyong-se 京租. Due to dry rice’s resistance towards droughts, it was possible to use a special cultivation method which involved sowing in a dry field and then moving to a wet field while waiting for the rain in the rainy season. Therefore, the dry rice was recognized as the wet field rice among the Japanese engineers in Manchuria. On the other hand, however, Japanese engineers in the northwestern part of Korea thought of it to be separate from the wet field rice and the land rice.

In past research on rice cultivation in Manchuria, most researchers agreed that the cultivation of wet field rice was successful around 1875, along with the spread of wet field rice cultivation in various parts of South Manchu-



ria. The author presents an alternative view and argues that wet field rice cultivation spread to Manchuria via Korean immigrants during 1875. This led to Korean immigrants settling, arranging irrigation facilities, cultivating the dry rice, and “stabilizing” their cultivation skills by the end of the 19th century. In this paper, we focus on the rice cultivation research between Manchuria and Korea before the second world war, and point out that dry rice was historically cultivated in northwestern Korea and South Manchuria, while introducing the differences in knowledge between the two regions. In this paper, the characteristics of dry rice implemented the situation before wet field rice was imported, such as with Japanese species, and we clarify that the feature was one of the important nodes that shifted from native rice cultivation to modern rice cultivation.

#### The Anti-fascist Discourse of the Chinese Communist Party, 1943–1947

YOSHIDA Kazuki

Japan’s declaration of war against the United States and the United Kingdom on December 8, 1941, connected the Sino-Japanese war with the war in Europe. It is well-known that this declaration established the so-called International Anti-fascist United Front, an alliance of the United States, the United Kingdom, the Soviet Union, and China. However, studies have failed to mention that the Chinese Communist Party (CCP) consistently applied the logic of the Allied powers’ anti-fascism up to the time of the Second Civil War. Moreover, the CCP’s criticism of the Nationalist government and American “imperialism” was also rooted in anti-fascist rhetoric. This study reveals the history of the CCP’s expanded logic of anti-fascism up until 1947.

The anti-fascist discourse of this period, which criticized the Kuomintang based on the logic of the Allied powers, emerged from the CCP’s strategic appeal to the Allied powers, anti-Chiang Kai-shek forces within the Kuomin-